「不思議アタマ」のススメ

「アイスプラネット」（二年）

椎名（しいな） 誠（まこと）

―この作品は、子どもたちに元気を与えたいという気持ちを込めて書かれたとうかがいました。

僕は子どもたちに、スケールの大きなことを考えたり、やったりしてほしいと思っています。現代社会は、ともすれば小さい枠にはめ込もうとする力が強く働いています。そこから外に出る力をもってもらいたい、というメッセージを込めました。

その力をつけるには、僕自身の体験でいうと、本を読むことから始まりました。そこから夢や疑問が生まれ、そこに描かれている世界を知りたい、行きたい、という思いが生まれ、実行してきたんです。

「本からその先へ」。作品のモチーフも、そういうところにあります。

小説家・映画監督。1944年、東京都生まれ。
89年『犬の系譜』で吉川英治文学新人賞、90年『アド・バード』で日本SF大賞を受賞。
主な著書に『わしらは怪しい探検隊』『岳物語』『白い手』『大きな約束』など。

これは、古い考え方かもしれないけれども、今こそ、そんな「その先へ」が求められているんじゃないかと思います。例えば、インターネット上で、モンサンミシェルの散歩道をたどることができます。もうそれだけで行った気になってしまう。未知の地にバーチャルで行けるというのはすごいことなんだろうけれど、僕はむなしさを感じます。最初に知るきっかけはそれでもいいけれど、本当にきれいだと思い、行きたい気持ちをもったら、いつかは必ず、それを実現してほしいんです。

―そういう願いが、居候の叔父さんと甥との交流の中で描かれています。

ときどきアルバイトをしながら、世界を旅して写真を撮っている叔父さんが登場しますが、これはもちろん僕自身の投影でもあります。しかし、この叔父さんにはモデルがあって、僕が子どもの頃に、我が家に居候していた叔父さんのイメージが大いにあるんです。定職を持ちなさいって、いつも僕の母に怒られていました。中学生は僕自身。あちこちで材料を探してきて、一緒に僕の部屋を造ってくれたこともありましたよ。僕はこの叔父さんからとても影響を受けたんです。

いつもぐうたらして、ほら話ばかりしているようなおじさんだと思っていたけれど、実はすごく魅力的な一面をもっている。人間には、いろんな生き方があるということも伝えたかったんです。

―叔父さんが、主人公に「不思議アタマ」をもってほしいと呼びかけますね。

「不思議アタマ」というのは、行間とか話の続きとか、そこに書かれていないことや、いろいろなものを知りたがる頭脳のこと。さらに、自分の力でそれを考え、答えを探すことができる頭脳です。積極的にいろんなものを読んだり、聞いたりしながら刺激を受け、常に「どうしてなんだろう」と考えている頭。現代を生きる子どもたちには、ぜひ「不思議アタマ」を鍛えていってほしいという僕の願いなんです。